

「いのち」を大切にすることをはぐくむ道德教育の充実をめざして

— 「歌」を活用した道德の時間における指導事例の提示 —

西田 育世

「いのち」を大切にすることをはぐくむためには、「いのち」の存在を「かけがえのないもの」として実感できるような、「かけがえのない自己」を確立していくことが重要である。そして、自分がかけがえのない存在であると実感するためには、かけがえのない他者との豊かな関係性を築くことが必要であり、そのような豊かな関係性の中で、「生きていることが素晴らしい」と思えるような充実感のある生き方をすることによって、「いのち」を大切にすることをはぐくまれると考える。

受動的に生きてきた自分から、主体的・能動的に生きる自分へと大きな転換期を迎える中学生の心に直接響くような「歌」を活用し、様々な他者を通して自分の生き方を見つめることができるような発問を工夫する中で、かけがえのない自己の生き方に迫る道德の授業の在り方について研究を進めた。

第1章 かけがえのない自己を確立するために

第1節 他者と出会って自己となる

自分に自信をもつということは、自分の人生を主体的に生きていくためには欠かせないものである。しかし、現代社会は、「生きる意味」が見えず、自己の存在をかけがえのないものとして実感できない現状があると思われる。

自己像は、自分を映し出す鏡のような役割を担う他者の反応に大きくかかわっており、成長過程において、どのような他者とどのような出会い方をするかが、自己形成を大きく左右すると考える。

ありのままの自分を受けとめ、安心感や信頼感を深められる他者との豊かな関係性の中で、かけがえのない自己は確立されていくと考える。

第2節 受動的な自己発達から主体的な自己形成へ

「幸福度」に関する調査で、日本の子どもたちが孤独を感じている割合は、他の国々に比べて多いという結果が出た。家庭や学校、地域等、周りに多くの人があっても孤独を感じるのは、自分の存在が理解されていない、受け入れられていないと感じているからかもしれない。

個人主義や個性尊重といった「個」は、他者の存在が前提となる。様々な他者との関係性の中に独立した「個」が存在するのであり、切り離れたところで論じられるのは孤独な「孤」である。

生徒が主体的に自己を形成し始める時期に大切なのは、「開かれた個」としての目をもつことである。主体的に生きるということは、自分勝手に生きることではなくて、他者を通して見える自分の姿に気づいて、自分で自分を変えていくことではないかと考える。

第2章 かけがえのない自己の生き方を見つめるために

第1節 かけがえのない自己の生き方を関係性の中でとらえる

道德の時間は、生徒一人一人が自分自身の生きる意味を考え、自分の生き方を見つめる時間である。そして、その一人一人の具体的な生き方は、様々な他者との豊かな関係性の中で見えてくる。その観点から、生徒が自分のこととしてとらえることのできるような、他者との出会いが重要となる。

図1は、道德の時間をどのような視点でとらえたらよいかを表した図である。

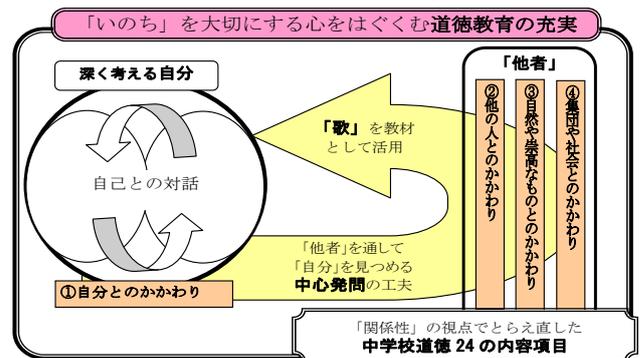


図1 充実した道德の時間の在り方

かけがえのない他者との出会いの中で、かけがえのない自己が確立していくのであり、自分の存在がかけがえのないものであると実感できることによって、かけがえのない自己の生き方についての自覚が深まると考える。そのためには、「歌」でかけがえのない他者と出会い、他者を通して自分を見つめる中心発問を通して、かけがえのない自己の生き方に出会うことが大切なのではないかと考える。

第2節 「いのち」を大切にすることをめぐむ 関係性の視点でとらえた内容項目

「いのち」を大切にすることは、他者との豊かな関係性の中ではぐくまれる。このことを踏まえ、お互いがかけがえのない存在であるということが実感できるような豊かな関係性を築くことのできる授業展開を考えることが大切である。

この観点から、24の内容項目を、関係性の視点でとらえ直し、様々な他者との関係性の中で、かけがえのない自己の生き方を見つめることができるような道徳の授業の在り方を考えた。

第3節 「歌」で出会う

昨年度の研究で、自分の生き方に迫るためには、資料で提示する他者の生き方を単に紹介するのではなく、その生き方が生徒にとってかけがえのない出会いとなるようにしなければならないと考え、生徒の心に直接響く「歌」を使った道徳の実践授業を行った。「歌」を通して、自分の姿を見つめ直す生徒の様子から、「歌」が生徒に語りかける力の大きさを感じることができ、今年度も「歌」を活用した道徳の授業を進めることにした。

第4節 他者を通して自己を見つめる中心発問 の工夫

自分の価値観に新たな視点を加え、自分の生き方を見つめるためには、自分の視点から他者をとらえるのではなく、他者の側から自己を問う形が必要である。つまり、他者を鏡のような存在として、そこに自分の姿、自分の生き方を映して見ることによって、自分の生き方を具体的にとらえることができるのではないかと考えた。

自分の生き方や、自分の進むべき方向性を、生徒自らが気づけるような教師の支援の在り方として、他者を通して自己を見つめる発問を工夫した。

第3章 実践授業を通して

第1節 「Continue」を使った道徳の授業

この歌は、歌詞に表されたストーリーのもつメッセージ性に重点を置いたものである。話し言葉のラップ調で、歌詞の内容も、日常生活のどこにでもある状況が描かれており、中学生にとって共感しやすいものであった。また、テレビドラマの主題歌として使われているので、ドラマの内容と関連させて歌詞の意味を考える生徒もいた。

生徒は、自分を支えてくれる他者の存在に気づくことで、今まで当たり前のように過ごしていた日常生活について見直す機会となった。

第2節 「ぞうさん」を使った道徳の授業

「ぞうさんという歌でこんなに考えることができるとは思わなかった。」「今度、この曲を聴く機会があれば、この授業で学んだことを思って聴くし、自分に自信をもつ。」という生徒の感想からもわかるように、幼い頃から慣れ親しんだ歌だからこそ、歌にまつわるエピソードや作詞者の思いを知ることによって、より深く考えることができたのではないかと思われる。

第3節 「僕が一番欲しかったもの」を使った 道徳の授業

この歌は、「一番欲しかったもの」を歌詞の中で具体的に表しているわけではないので、生徒一人一人が自分の感性で、想像をふくらませることができ、発想をひろげることができたのではないかと思われる。そして、「幸せ」や「笑顔」などのキーワードから、人とのかわりに気づき、自分が具体的にどのような生き方をめざすべきかを考える生徒の姿が見られた。

第4章 成果と課題

第1節 実践授業から見えてきたもの

今回の実践におけるポイントは、「歌」を通してかけがえのない他者と出会うこと、そして、他者を通して自分の生き方に会うことである。

生徒は、歌詞の内容やメロディに感動を覚えるだけでなく、その歌に込められた思いや願いをストレートに受けとめ、共感していたように思われる。そして、その歌と出会うことによって、過去の自分自身と出会い、自分のもつ価値観をあらためて見直し、そこから今の自分についての考えを深めることができたのではないだろうか。

生徒の発言からは、指導する側が意図していたこと以上に、一人一人の生徒がもつ豊かな感性が感じられ、驚かされることもあった。それほどに、「歌」のもつ力が大きいことを実感した。

第2節 他者と響き合う中で

一人一人の個性を認めていくことはたやすいことではない。しかし、教師自身が生徒に対して、生徒の個性を一人一人認めていかなければ、生徒が自分の個性を肯定的に受けとめることはできないし、一人一人がかけがえのない存在であるというかわりにはならない。かけがえのない自己を確立するためには、お互いがかけがえのない存在として深くつながり、響き合うことのできる、豊かな関係性を築いていかなければならない。